

くろぐみだより

第17号 平成27年 3月 17日

せよばらばくたちのようちえん (副園長)

インターネットやSNS ってのは、いいところも悪いところもあるんだろうけど、とにかく便利なもので。

卒園生のお母さんが書いた文章や写真を見ていると、「今はバスケットで県大会目指してがんばっています」とか、「大学合格！一人暮らしスタート！」とか書いてあって、びっくりしてしまう。

みんな、おおきくなってんだよなあ。

休日にオートバイをいじってたら、中学生の彼が走り寄ってきて「コウシ先生！ゼファー乗ってるんすか!？」なんてニコニコしながら聞いてきた。

なにが、「んすか!？」だよ。こないだ中華料理屋で会った時は、「お！〇〇くん！久しぶり！」なんて挨拶しても、思春期丸出しで、目線も合わせず会釈してきたのに。

「おまえ、オートバイ好きなのとか乗るのは反対しないけどさ、暴走族なんかやるなよ」「え…だめっすか?」「だめだよ！母ちゃん心配するだろ!」

「いや…でも…」
「とにかく、おまえが事故したり悪いことしたら、悲しむ大人はいっぱいいるんだぞ。それ、忘れんなよ」「はあ…」

…ま、言われても、まだわかんないよね。

制服スカートの高校生が、座り込んで友達と話していた。

「おい、パンツ見えてるぞ」と教えてあげた。「なんだ、コウシ先生か。それどころじゃないもん」「なにが?」「彼氏と別れた」「あら、そーかそーか。ショックだな。でも大丈夫、なんと人類の半分近くは男なんだし、他にいいのがいっぱいいるから」「え、そんな無理」「なんで?」「だって、男なんて顔でしか選べないもん」

ニコニコで言い放ってきよった。

大学生の彼は、SNS に書き込んでいた。今の自分への葛藤を。将来への漠然とした不安を。

久しぶりに彼とキャンプに行きたいと思った。今なら、星空の下に火を囲んで、暗闇に酒でも飲めるんだろう。

今は遠いところに住む彼から、メールが来た。

「今は、電波の届かないような山で、チョウザメの養殖の仕事をしています」「昨日は一日ドブさらいでした。でも、昔からやりたかった仕事なので、苦しくありません」

そんなことが書いてあった。

先日のこと。

年長さんももうすぐ卒園、だけど、そんな実感、どうも、湧いてこない。

そんなことを考えていたら、ちょうど、年長さんがドッチボールを始めるところだったので、仲間に入れてもらった。

けっこう真剣にやってたのに、当てられた。

しかも、突き指したらしく、右手の薬指が腫れている。

なんだよ。いつの間にかほんとに、おおきくなりやがってさ。

勝敗がつき、2回戦目を行うことになった。

なぜか、多くの子が「スーパー外野（勝負のはじめから外野にいて、誰かが当てられて外野に来た場合、無条件で内野に入れる）」になりたがるため、チームのうち7人がじゃんけんで決めることに。

じゃんけんはい、あいこではい!

すぐ、誰かが気づく。「こんなたくさんでじゃんけんしても決まらないよ。2人ずつやろう!」

7人なので、1人の子が、あぶれる。

他の子は、みんなじゃんけんを始めている。そんな中、あっ、と気づいたその子は、やや隅のほうで「おれは?」と小声で言って、少し困っている。

ぼくが、あ、声かけようかな、と、手を伸ばした瞬間、他の子がサッと来て、「おい、こいつとじゃんけんしなよ」と、その子をじゃんけんに入れた。

ぼくの伸ばしかけた手は、なにも掴まずに、もとの位置に戻る。

そうか。そうなんだ。もう、自分で、自分たちで、気づいたり、どうしようか具体的に考えたり、決定したりできる。当たり前に。

余計なことを言わないでよかった、と、ぼくは遠くから、じゃんけんで一喜一憂する笑顔たちを見る。

生活発表会が終わったあとのこと。

あるクラス、数人の子は、インフルエンザで発表会に出られなかった。発表会后、登園した彼らは、本番、自分の役を、他の子が代わりにやってくれたことを知る。

ずっとがんばっていたあの子は、悔しいかな…?と、思った。人前で演じることによってちょっと苦手意識のあった子は、少しホッとしたりもするのかな?とも思いました。どんな気持ちなんだろう、と思った。

そうしたら、その子たちは、手紙を書いていた。何通も書く子もいた。表現の仕方はいろいろあるけれど、つまりみんな、「自分の分までがんばってくれてありがとう」、そんな、感謝の手紙を。

ある子は、運動会のリレーのとき、終盤近くまで「自分がいれば勝てる!」と言っていた。「自分」だった。

今は、「自分のセリフも言ってくれてありがとう」と、書いた。先生に言われずとも、親に言われずとも、友達に言われずとも、自分で、書いた。字はまだ、決して得意ではなかったし、自分から手紙を書くような性格でもなかったのに。劇も、得意ではなかったかもしれないけど、それは自分のやるべきこと、とっていて、責任感も感じていて、なお、それをやれなくても、がんばってくれた友達に、感謝の手紙を書いた。

みんなみんな、大きくなった。みんながいたから、大きくなった。

いろんな時期に、いろんな表し方で、みんな違っていた。かみつきもしたし、意地悪もしたし、甘えたり、ぐずったり、職員室に逃げてきたし、めちゃくちゃ遊んだし、だからケンカもしたし、嫌いになったし、また好きになったし、受け入れたし、認めたり、笑ったり、怒ったり、泣いたり、それで結局、笑ったり。

みんな違ったから、大きくなれた。みんな違ったまま、大きくなれた。

痛いこともたくさんあったけど。悲しいこともたくさんあったけど。

「わたし」を出して、「あのこ」を受け入れて、そうして、楽しくなった。生きていることは楽しい、みんな全員違うけど、最高だ。

友達を叩いたりしなくなったな。そういえば、最近職員室に来なくなったな。お、野菜、大盛りにしてるじゃん。あれ?あの子とあの子、あんなに楽しく遊んでるじゃん。あ、ケンカだ。おーおー、すぐ3、4人集まってきて、わーわー話して、あ、解決したみたい。

なんだよ。いつの間にかほんとに、おおきくなりやがってさ。

「かぐや姫」のお話が、昔から支持され今に残っているのは、あのお話が「親離れ・子離れ」を、テーマというか、メタファー（暗喩）にしているからだ、と、ぼくは思っている。

つまり、かぐや姫の物語が持つ意味は、以下のようなものじゃないだろうか。僕が勝手に解釈しているのだけど。

どんな子の生誕も、金色に光るように特別だったはずだ。

そうして大事に育てていく。ごはんをあげ、お世話をし、大きく育つ。

「いつまでも離れません」「私は結婚する気はありません」と、ここにいてくれる。親の手を、ぎゅっと握りしめていてくれる。

でも、どの子も、成長し、ある「逆らえない運命」に出会ってしまう。

それは、「恋」かもしれない。「どうしてもやりたいこと」かもしれない。

逆らえない運命に出会った子は、ずっと、親の手を離してしまう。

あんなに強く、子どものほうから握りしめていたはずの手を、子どものほうから離してしまう。あまりにもあつけなく。

親の私の、「行かないで」の心も届かず、子どもは、いつのまにか遠くに行

ってしまうのだ。

残るのは、伸ばしかけて開かれた、親の手だけ。

そうして手の届かぬ先で振り返った、かつて「私の子ども」だったあの子は、わたしを忘れずにいてくれるだろうか。わたしに言ってくれるのだろうか。

「ありがとう」と。

かくや姫のお話は、親の誰もが経験する「親離れ・子離れ」、それは、親の願いだったはずの、「子の育ちや自立」といった現象に付随する「親の、悲しみではないけど、逃れられない寂しさ」をテーマにしているから、共感されてきたのではないだろうか。

ぼくの伸ばしかけた手は、なにも掴まずに、もとの位置に戻った。

すっかり外野も決まって、今度はボール争奪のじゃんけんをしている。みんなみんな、とっても楽しそうに笑って、飛び跳ねていた。

あの子たちは今日、ここから、旅立っていく。

あのバトンタッチリレーのように、ぼくたちはいろんな経験のバトンを渡したかった。

いつまでもそばにいて、見守って、時にすこし、助けたかった。そういうものだと思っていた。あまりにも毎日、当たり前のように近くにいたから。

あの子たちは、ぼくたちの伸ばした手より、今、もっと先にいて、どんどん前に行ってしまう。

あのときぼくにしがみついた手も、つないで歩いた手も、離れていく。

それでいいのだ。大きくなれ。前に進め。

それがぼくたちの願いだったのだから。

振り返るな。今に生きろ。先に行け。忘れていい。

ぼくたちが育てたんじゃない。

きみたちが自分の力で、大きくなったのだから。

ぼくたちは願い、そしてすこし助けただけ。

だから、さみしくても、卒園、おめでとう。そして、さようなら。

そう、さようなら、でも、これからも、きみたちの幼稚園は、ずっとここにある。たぶんぼくはずっとここで、祈っている。時に思い返している。天井のラベルを見上げながら。庭のヤマモモを撫でながら。

きみたちは、これからもずっと、何かをし続け、大きくなり続け、新しい道に、ドキドキしたり、迷ったり、それでも進んでいくんだろう。だから、もしも傷つくことがあったのなら、少し元気がなくなったのなら、いつでもここにいるから、いつでもおいで。どんなことでもいい、中学生でも、高校生でも、いつでも、そのときのきみたちの、ありのままそのまんまの話を聞かせてほしい。

きみたちの幼稚園は、いつまでもきみたちの幼稚園。

きみたちの山、村積山のふもと、いつでもここにあるから、いつでもおいで。

それだけは、忘れないでいてほしい。

じゃあね。また、いつか。